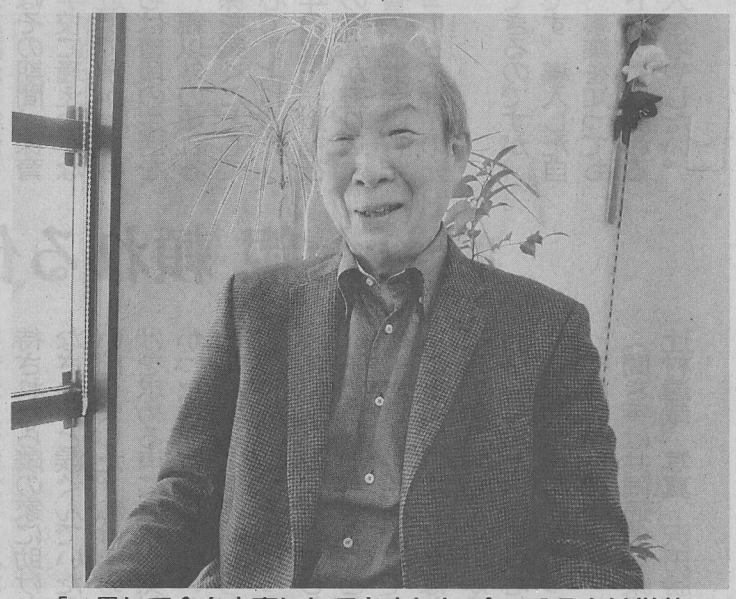
home@mb.kyoto-np.co.jp

それぞれの人生てつがく　第5部

人とつながり、共に歩む

建築家、工学博士　松村　正希さん（74）

出会い感謝 常に弱い人の側で



「一貫して食を大事にしてきました。食べることは栄養や生活の質、生きる意欲、楽しみの時間をもたらします」と話す松村正希さん（京都市中京区）

ユーモアと笑いを大切にする。

「子どもたちに笑顔を」と近年、絵本の原作を書いている。「おなら」シリーズで、「けむしのおなら」「くじらのおなら」「だんごむしのおなら」に続いて、まもなく4冊目の「へこきむしのおなら」を出版する。

「へこきむしは100度の温度のおならを続けて20回以上出すこともあるそうです」。科学的に確かめるために研究者にも会った。

「そのおならでご飯を炊いたらどうだろう、と夢想しました」。物語は、おなかを空かした子どもたちが、へこきむしたちのおならで炊いたご飯を食べて元気が出て希望が湧き、自分の夢を追いかけていくという内容だ。

現実に社会問題になっている「子どもの貧困」がテーマで、物語のベースは、宇治市で生まれた松村正希さん自身の子ども時代の空腹体験による。父の体が弱く、経済的に困窮した。小学3年生から新聞の朝刊、夕刊を配達して家計を支えた。中学卒業後、高校を受験したが失敗し、旅館のアルバイトをした。

つらい状況のなかで手を差し伸べてくれたのは中学校の恩師。既に卒業していたが、「1年間面倒見たる。行きたい学校を目指せ」と校内の一室で模擬試験などのテストを受けさせてくれた。

翌年、京都市立の工業高校の建築科に合格できた。就職先に苦労したが、窯業科の先生の導きで設計事務所に入ることができた。当時を振り返り「2人の先生との出会いがあって、私は道が開けました」と感謝する。

社会福祉への関わりは、20歳の頃に演劇活動をしていた時、医療少年院（当時）の教官に求められ、訪問ボランティアをしたのがきっかけ。年齢の近い入所者の演劇の手伝いをした折、知的障がいの少年と触れ合ったことが始まりだった。

1級建築士を取得した後、35歳で独立。メーカーの元経営者との縁で青山音楽記念館（京都市西京区）を設計、完成させた。だが、新しく立ち上げた設計事務所のため、仕事先がなかなか開拓できない。名刺を配り歩く日々が続いた後、社会福祉法人から設計の依頼を受けた。

福祉先進国といわれる北欧のスウェーデンやデンマークにも行って学び、その経験を基に2000年、日本では先駆的な個室ユニット型の特別養護老人ホームを発表した。

これまでに高齢者施設、障がい者施設、保育園などを設計している。

01年、53歳で福井大大学院に入り、06年に工学博士の学位を得た。学位論文のテーマは「認知症高齢者・重度障がい者の食と住環境に関する仮説と検証」にした。

松村さんの設計思想の根幹にあるのは「人が生きるとはどういうことなのか。いかにいのちや人権を守り、安心感が持てて、豊かに生きる意欲を生み出すか」。その実現のため、とりわけ食べることの重要性と人生や生活の継承に重きを置いている。

家庭に恵まれない障がい児入所施設「天草学園」（熊本県天草市）では、子どもたちの意見もとり入れて建て替えの設計・監理を行った。完成後に京都の料理店主や歌手らと再訪し、食事会や音楽・朗読会を催した。歌「うみは待っている」も作詞した。

♫泣きながら　頑張って
生まれてきた　でも　何か
あったら　そこに帰りたい
と　きっと　思う　海に囲
まれた天草の大地♫

「あなたたちは決してひとりぼっちではない。いろいろな人たちの愛に包まれ、たくさんの人が支えている。いのちの大切さを感じて、生き抜いてほしい」との思いを込めた。

松村さんは「自分の子どもの頃の厳しい時代、人との出会い、つながりで今があります。子どもたちやしんどい人たちにできないことが、私たちと一緒にできるかもしれません。だから、共に歩みたい。手をつなぎ、少しでも笑顔になれるように」とこれからも歩みを進める。

（鈴木哲法）

＝随時掲載します